

グリフィスに関心をもって福井にお越しいただく機会がございましたら、当館とともに是非足を運んでいただきたい場所があります。福井駅から徒歩5分、当館からは10分の距離、福井市の中心部にある、「北ノ庄城址公園」です。

その名の通り、かつて柴田勝家が構えた居城の中心部であり、発掘された遺構を見ることができます。この場所こそ、実はまさにグリフィスが福井で住んでいた屋敷の場所でもあるのです。「えっ、グリフィスの家って、幸橋のたもとの、銅像や異人館跡碑が立っている辺りじゃないの?」。はい、当館外観のモデルとなった洋風住居があった場所はそこなのですが、その家に入居する前に半年以上(1871年3~9月)、つまり洋館よりも長く暮らしていた屋敷があったのです。

城址公園休憩所の二階にあがると、発掘された遺構の図がわかりやすく展示されています。ちょうど休憩所の敷地にも重なりながら、公園前的大通りにかつて武家屋敷が建っていたことが、その図からわかります。その屋敷「酒井外記邸」こそ、グリフィスが住んだ最初の「異人館」でした。

「私に当てられた古い屋敷(旧酒井邸)は建てられてから百九十七年たっていて、これまで代々同じ一族が住んでいた。この家は柴田勝家の古城があった所に建っていた。その城で柴田とその一党が切腹し、自ら火をかけて滅んだのである」。

グリフィス著 The Mikado's Empire (山下英一訳『明治日本体験記』) 第9章より

福井藩祖結城秀康以来の城、すなわちグリフィスが通勤した福井城は、柴田の城と領域は重なりますが、プランはまったく違います。前者の中心は現在の県庁にあって何重もの堀に囲まれていましたが、柴田の城の中心は足羽川に接していました。その跡地は福井藩重臣酒井外記の屋敷となり、廃藩後は「外記様町」という(旧)町名の住宅地になりました(“げきさんちょう”と読みます)。

休憩所を出て、あらためて屋敷の遺構(石垣)をご覧になると、公園前の大通りに、グリフィスが暮らした外記邸の幻が浮かぶのではないのでしょうか。(車の通行が多いので、隔世の感しかないかもしれませんが・・・)。

ただ、うれしいことに、この公園には九十九橋(場所はグリフィス館よりもさらに下流)の遺構も移設されていて見ることができます。かつて半分が石造、半分が木造の奇橋として知られ、柴田の時代すでに北国街道上にあった大橋であり、旧藩時代は柴田の亡霊スポットでもありました。

「ある晩には、柴田勝家とその戦士の首のない幽霊が馬に乗ってこの橋(九十九橋)を渡り、古い城内に入っていくという。ある静かな晩に、蹄のぱかぱかという音が聞こえ、この首のない騎手の一隊が見えると地元の人思っている。しかし柴田が死んだ古い城のあった場所に私は七か月住んでいたけれども、その古い英雄の幽霊を一度も見えていな

い」。上掲書第 15 章より

「この屋敷（酒井邸）の門から西数十フィートの所に石がひとつあり、伝説によると、柴田がここに立って弓を引きしぼり敵の陣地へ矢を放つと」、腰かけた秀吉の上に差し掛けられた天蓋の柱を引き裂いたとグリフィスが語る敵陣とは、足羽川の対岸にたたずむ足羽山の上、福井市自然史博物館前の「天魔ヶ池」辺りと言われています。城址公園から直線距離で 1 k m 離れていますから、これもグリフィスが大好きな奇譚の内です。

とはいえ、日本通史 *The Mikado's Empire* の著者としては、怪談や奇譚だけではなく、北ノ庄落城、柴田滅亡の緊迫の場面を堂々と描きたいところです。

「その老いた僧侶の口からこぼれ、私の通訳が翻訳してくれた物語の大体は、現地の歴史家によって書かれている」。彼は通訳の岩淵龍太郎と共に勝家の菩提寺（西光寺）を訪れ、灰の中に残された武器など現場の遺品を見せてもらっていました。

現地取材で筆力はましたでしょうが、やはり「現地の歴史家」によるテキストが元ネタとして必要です。彼の歴史書における中世日本の叙述は、日本史研究の第一人者アーネスト・サトウ（英国外交官）により全訳されていた、頼山陽の『日本外史』に依っています。ですが、*Japan Weekly Mail*（グリフィスも購読していた英字紙）に当時サトウが発表していた中に近世の内容はありませんし、どちら

にしる『外史』に北ノ庄落城の場面描写はありません。

実際に、*The Mikado's Empire* 第 24 章に描かれた北ノ庄落城の描写をみると、群書類従所収の大村由己「柴田退治記」の文章が、グリフィスの英文そのままだと気付きます。生徒など周囲の日本人に協力してもらい、翻訳されたテキストを活用したのではないのでしょうか。以下、当該箇所の記事を掲載します。

・・信長の死を知らされてすぐ、秀吉は毛利と手打ちをして、京都へ急行し、明智を破り、屠った。この暗殺者の末路から、現地に一つの諺が生じた。“明智の三日天下”と。今や名声と権力の頂に立つ者は、その望みをミカドと宮廷に拒まれるはずもなく、賞たる高位を目前にしていた。彼の主人の息子たちのうち、長男は幼子を残して死んでいた。次男には家康の援助があったので、秀吉は彼と和解した。三男信孝は弱く、彼の首将で、信長の妹と結婚していた柴田の支援を受けて、自らの権利を保とうと努めた。秀吉は美濃へ進軍し、彼を破り、柴田を追って越前に入り、数度の小競り合いを経て、彼の城を焼いた。イエズス会士の報告によれば、以下の如くである。“信孝の同盟者のひとりが、信長の義兄弟でもある、シバタ ドノだった。シバタの城塞（今の福井）は囲まれ、逃げ道もなく、彼は朋友の妻子、家来たちに正餐を供すると、自らの城に火をつけ、先ず自ら妻、子供たち、女中たちを殺し、彼の朋友たちがそれに倣った後、自殺した。倒れ転がる彼らに、やがて火が回り、みな灰となった。”

1871年、その年の私の福井における住居は、まさに柴田の古城の一角に位置した。

彼の墓は町からやや離れた、数本の古さびた老松の下に立っている。そこには寺が建てられ、私が訪れた時、その寺をあずかる老僧が、札を貼って大切に保管されていた古い箱を持ち出して来て、恭しく開けてくれた。箱の一つの中身は、錆びた胸当てなど、焼け跡で拾われた柴田の甲冑の一部だった。他にも灰の中から救われた遺物が、私に披露された。その老いた僧侶の口からこぼれ、私の通訳が翻訳してくれた物語の大体は、現地の歴史家によって書かれている。

幾多の敗走を重ね、現在福井と呼ばれている土地に彼はたどり着いた。すぐそこまで迫っていた秀吉は、町を見渡す愛宕山に布陣すると、町を取り囲んで攻め立て、日に日に包囲の輪を縮めた。援軍の望みもない、絶望的包囲陣の中で、柴田は真にエピキュリアンの如くあった。彼の将官、家臣たち全てに、大いなるごちそうがふるまわれた。明ければ死と、期して。最期を宣告された城内の全ての者たちが、食べて、飲んで、歌って、踊って、浮かれていた。明ければ誰も、この世にない。宴もたけなわ、柴田は別離の盃をがぶりと飲み干すと、妻に告げた。“ここで命を捨てず、城を出てはくれまいか。そなたは女だ。我ら男はここで死ぬ。別の誰かと結婚するのも、そなたの自由だ”。彼の妻は、信長の妹だったが、その精神も彼と同質だった。涙に濡れ、彼の愛と優しさに対し感謝を捧げたが、はっきりと言った。他の誰とも結婚などしない、夫と共に死ぬのだと。そして別れの歌を詠んだが、その時の彼女の心はもはや勇者のそれではなく、ひ

とりの女性のものだった。彼女は夫の短剣を、自らの心臓で受けた。

真のストイックの如く、柴田と一党は女と子ども全てをその手にかけてが、その死をみな喜んで迎え入れ、感謝を捧げるのだった。それから、正しい儀礼に則って、彼らは自らの体を開いた。敵の手によらず、自らの手によって死ぬことを好む、日本の勇ましき先人の後につづく、ハラキリによって彼らは死んだ。 （当館職員訳）

※概ね『柴田退治記』にみえる内容ですが、イエズス会史料の方の文章は、Walter Dickson（原文表記 Dixon は誤記）の *Japan* (1869) から引用されています。

柴田勝家との縁もさりながら、グリフィスにとって、この著作の大きなテーマである維新理解、すなわち幕藩体制の崩壊を知る上で、その体制の成立期を知ることが不可欠でした。また、西洋およびキリスト教と日本人が出会った時代、鎖国前の時代としても、開国後の時代における、日本人を生徒とする教師・牧師であったグリフィスには、考察が不可欠な時代だったといえます。

※アーネスト・サトウによる日本外史の翻訳については、楠家重敏『アーネスト・サトウの読書ノート』（雄松堂出版、2009）参照。同著者『ジャパノロジーことはじめ－日本アジア協会の研究』（晃洋書房、2017）と合わせ、グリフィスと同時代の在日西洋人による日本研究の裾野の広がりあってこそそのグリフィスの事績だと、よく理解できます。



地図上 D のあたりに酒井外記邸がありました。D の大通りに面して北側に北ノ庄城址公園があります。B がグリフィス記念館です。

：ちなみに A 橋本左内生地、C 異人館跡碑（洋館の方）、E 藩校跡碑（開校当初の位置。

グリフィスが教えた時期は・・・）、F 本丸跡（グリフィスが教えた時期の藩校）、G 左内公園（と左内さんのお墓）です。

本サイト「利用案内」の一番下「記念館から駅までのまわり道」の愛宕坂・北ノ庄城ルートにおいて、画像つきで記念館からの道案内をしてありますので、ご利用下さい。

：異人館跡碑については、「利用案内」JR 利用者アクセス道順の PDF はこちらの中で紹介しています。